

第8回「日本語大賞」

テーマ「あまり使いたくない日本語・もっと使いたい日本語」

中学生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

今日も自分にかける言葉

大阪府

大阪教育大学附属池田中学校2年生

西山 遥彩

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「だから……私は、出たいと思います。」何とか伝え終えた。私に集められた視線の数々も、再び前の、何も書かれていないホワイトボードに戻っていった。ああ、この雰囲気、なんか嫌だな……私は心の中でため息をつく。昼休みだというのに、にぎやかさはまるでない。横の多目的室では今頃きつと沢山の人がお昼の放送をききながら楽しく食事をしていることだろう。なんだか、私たちのいる音楽室だけが、そろそろ始まるはずの梅雨のようにどんよりと沈んでいるようだった。

六月——。私たち吹奏楽部員は、究極の決断を迫られていた。毎年恒例のコンクールに出るか、出ないか……。部としてのトラブルが多発した時期だった。このままで出ても良いのか——？ 私には出たいという意志以外はなかった。理由を述べる自信さえも……。

これで去年みたいに優秀賞なんて無理でしょ？ せっかく出るならもっとうまく合奏できるときがいいよね。なんか、部活まとまってるじゃないし。一人ひとりの意識の問題じゃない？ なんてこうなっちゃったの？ こんな、出る意味ないよね。……そんな、誰のものか分からないつばやきは、日増しにずしりと重くなっていた。設けられた話し合いの時間。思わずうつむいてしまうような沈黙の中で、ぽつりぽつりと言葉が聞こえた。

「今から頑張ったって」「これから少しずつでも努力すれば」「これまでの頑張りを」賛成派・反対派関係なく、なんだか妙に「努力」「頑張る」というフレーズが頭の中でガンガン響いていた。焦りと不安の中、少しでも救われた気分だった。意見より、言葉に。恐る恐る何度か手を挙げた私は、何を話しただろう。細かいことはもう思い出せない。ただ出たいという思いを強く強くぶつけていた。重苦しいムードの中、心にこだまする「努力」と「頑張る」という言葉は、力強くて、優しかった。私が家で怒られたときの逃げ口上、「次から頑張るから」とは全く違う頼もしさがあった。

その次の日、私たちはコンクールに出ることを決めた。そして、今——。七月下旬。さっさと宿題を終わらせろと言われ続けるこの瞬間にも、本番までのカウントダウンは進んでいる。あと少しで本番か……。毎日、鏡の中の自分に心の中で「頑張ろう！」と声をかける日々が、もうじき一旦終わる。コンクールが終わったら学校の式典に文化祭に……うわっ忙しい！ そんな心の中で叫んでいるのはもちろん、「頑張るぞ！」。

手に額に首すじにじつとりと汗をかきながら、コンクールまでの部活を楽しむ私がいる。今日も空は抜けるように青くて、高い。一か月前には見る度のため息をついていた楽譜は、今ではペンの書き込みが入り、お気に入りのマスキングテープで仲間からのメッセージがしみこんだ譜面かくしにはられている。優秀賞をとった去年の方が、今より演奏はうまいかもしれない。でも大丈夫だ。きつと大丈夫だ。使い込んだハンカチも、楽譜ファイルの汚れも、減ったお手入れ用のオイルも、みな努力の証だ。そして何より、心の中にはいつも頑張れを言ってくれる私がいる。

水筒のふたを開けて、顔を上げた。頭の中には、数日後の自分を想像した。まだステージに上がる前。きつとその頃私は緊張しているだろう。想像の中の私と目が合った。自信のあ

る真っ直ぐな眼差しだ。未来の私は今の頑張り次第。そう考えたたん、心がじんわりと熱くなるのを感じた。頭の中から本番の私のイメージを消す。ここからは、今の私に……。水筒のお茶をぐびぐびと飲みながら、笑ってみた。お茶は、キン、と冷たかった。

頑張れよ、私！ もっと言いたい。もっともっと、叫びたい。心の中でもっと響いてほしい。見上げた太陽は、いつもよりずっと、眩しく感じた。私頑張るよ！ コンクールもその後、フルパワーで頑張るよ！ 心の中こだまする言葉は、なんだか力強かった。

「努力は報われる」 って、こういうことなのかもしれないな。ふと思った。

そして、頑張ったらきつと笑顔になれるんだよ、と教えてくれたのは——ガッツポーズをつくって笑う、一週間後の自分自身だった。

あふれ出る笑顔は、最高だった。

私たちの努力は、最高だった。